

身はたとひ 武蔵の野辺に朽ちぬとも 留置まし大和魂『留魂録』

参考著書「留魂録」吉田松陰

吉田松陰の遺書「留魂録」の冒頭の一首の和歌です。

薄葉半紙を四つ折りにし、十九面に5千字を細書きした「留魂録」は、全体を十六章に分ける。門下に対する最後の垂訓である。

諄々と説き、訴えかけるような語調で、時勢の現状分析から、信じられる志士の紹介、連絡の方法まで実に行き届いた遺書だが、特にその第八章は、死を目前にして悟りをひらいた人の死生観を述べたものとして注目すべき一文である。

現代語に訳すと・・・

死を決するの安心

今日、私が死を目前にして、平安な心境でいるのは、春夏秋冬の四季の循環ということを考えてからです。

つまり農事を見ると、春に種をまき、夏に苗を植え、秋に刈り取り、冬にそれを貯蔵する。

秋冬になると農民たちはその年の労働による収穫をよろこび、酒をつくり、甘酒をつくって、村々に歓声が満ち溢れるのです。

この収穫期を迎えて、その年の労働が終わったのを悲しむ者がいるということを知ったことがあります。

私は今、三十歳で生を終わろうとしています。

いまだ一つも成し遂げたことがなく、このまま死ぬのは、惜しむべきかもしれません。

だが、私自身について考えれば、やはり三十歳の花が咲き、実りを迎えたときなのです。

人の寿命には定まりがない。

必ず四季をめぐるいとなまれる農事のようなものではないのです。

しかしながら、人間にもそれにふさわしい春夏秋冬はあるといえましょう。

十歳で死ぬ者には、その十歳の中に、おのずから四季がそなわっているのです。

二十歳には、おのずから二十歳の四季が、五十、百歳にもおのずからの春夏秋冬があるのです。

私は三十歳、四季はすでに備わっており、花を咲かせ、実をつけているはずで。

それが単なるモミガラなのか、成熟した粟の実であるのかは、私の知る限りではありません。

もし、同志の中に、私のささやかな真心を憐れみ、受け継いでやろうという人がいるなら、それはまかれた種子が絶えずに、穀物が年々実っていくのと同じで、収穫のあった年に恥じないことになるでしょう。

同志よ、このことをよく考えてほしいのです。

もし同志の中に、私のささやかな真心を憐れみ、受け継いでやろうという人がいるなら・・・

おそろくすべての松陰門下が、これを何度も暗記するまで読み返し、

涙しながら叫んだことでしょう！

「私が松陰先生の意志を継ぎます！」

現在でも、この文章を読むと、心が震えます！

自然に涙が出てきます。